

現代カナダ・イヌイット社会における贈与交換とメッセージ交換について：北ケベック・アクリビック村での1990年のクリスマスを中心に

著者	岸上 伸啓
雑誌名	人文論究
巻	52
ページ	73-86
発行年	1991-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5794

現代カナダ・イヌイット社会における 贈与交換とメッセージ交換について：

北ケベック・アクリビック村での
1990年のクリスマスを中心に

岸 上 伸 啓

1. はじめに

「交換」は、大別すれば、経済的交換と社会的交換とに分けることができるが (Simmel 1900)、特に後者は、社会学や文化人類学の中心的な研究主題であるといえる。

M. モース (Mauss 1923-24) は、北米北西沿岸インディアンであるトリンギット族やハイダ族に見られる「ポトラッチ」(注1) と呼ばれる贈与交換などを研究し、有形財や無形財の交換は実際の経済的価値以上のものを含み、あるいは意味づけられており、功利主義的な経済原理では説明できないことを指摘した。そして「ポトラッチ」は、社会全体と関係する交換=給付システム(全体的給付組織)として究明されなければならないとした。

B. マリノフスキー (Malinowski 1922) は、現地に長期滞在し、参与観察に基づいて情報を収集し、民族誌を作成したという点で、現代社会人類学の父と呼ばれている。彼は、メラネシアのトロブリアンド諸島で行われている「クラ」と呼ばれるネックレスの儀礼的ともいえる交換活動を研究した。彼は、この交換を経済的視点からのみでは理解できないとし、交換物のもつシンボル機能、社会的威信賦与機能や交換活動を通して生み出されるトロブリアンド諸島社会の統合や連帯性の維持機能という非経済的視点からの解明を行なった。

モースの影響を強く受けたレヴィ=ストロース (Lévi-Strauss 1949) は、人類学史上画期的な業績と評価されている『親族の基本構造』の中で、世界中の多くの民族で「母方交差イトコ婚」が好まれたり、義務づけられているのは、この婚姻システムでは女性が単系出自集団間を集団 A → 集団 B → 集団 C というように交換されることにより、社会全体の統合や安定性が生み出されているからであると主張した。彼は、婚姻システムをメッセージとして女性が交換されるシステムとして理解したのであった。

M. サーリンズ (Shalins 1972) は、無文字社会における物財の流れと社会関係に着目

し、次の様な見解を表明している。

「特定の社会関係が、所与の財の動きを拘束はするが、逆に特定の互換活動がまた、特有の社会関係を暗示してくれるからである。友人が贈与をすれば、贈与が友人をつくるのだ。…物財の流れが、社会関係を保全したり、開始したり、するからである。」

(Shalins 1972 訳 P.224)

そして彼は、互酬性とは交換の全種類をふくむ交換形態の連続体であり、その両極間の距離は社会的距離であるとのべている (Shalins 1972 訳 P.229)。彼は、互酬性は、愛他主義的な互換活動である「一般化された互酬性」、直接的な等価交換である「均衡のとれた互酬性」と功利的な利益をめざす「否定的互酬性」に分けることができ、それぞれが親族圏内、部族圏内そしてそれ以外という社会的距離に対応していると主張しているのである (Shalins 1972 訳 P.285)。さらに無文字社会の種々の交換形態や活動は、人間はだれしも快楽を求める傾向にあるという原理では説明できるわけではない、と指摘している (Shalins 1972 訳 P.285)。

社会学者ホマンズ (Homans 1961) は、社会的交換の視点から人間の日常における相互作用を研究した。ホマンズは、動物が人間と共有する社会的行動の属性に着目し、ハトの行動をモデルとし、動物行動の原則は人間行動に一般化しようと仮定した。また二人の行為者を含む社会的行動は、最終的に個人の行動に還元しようと仮定したのである。彼は、スキナー流のオペラント心理学に依拠しつつ、「交換」プロセスの原理として、(1)成功命題、(2)刺激命題、(3)価値命題、(4)剥奪=飽和命題や(5)攻撃=是認命題を提起し、対面的関係、二人の個人間の限定交換、心理的欲求と経済的欲求の二重の強調および交換項目の功利的価値などに力点を置いた行動心理学的交換理論を主唱した。

ホマンズの研究を「心理学的還元主義」として批判した P. ブラウ (Blau 1964) は、社会的交換を、経済学的視点から考察することを主張し、社会的交換とは「報酬をもたらす他者の反応」を条件とする行動からのみ成り立っているとした。彼は互酬の相互作用は当事者同士の対等な結合を促進し、社会的統合を生み出すけれども、互酬の相互作用の破綻は、支配-服従の関係 (地位差) を生み出すと主張した。P. ブラウの交換理論は、「社会学的交換理論」と通常は呼ばれているが、ホマンズの研究と同様、二者間の相互行為に重点を置くという点では、極めてミクロな視野のアプローチと言わざるを得ないと思われる。

以上のように文化人類学や社会学では、「交換」を、財やサービスのやりとりだけではなく、行為・態度・感情などの相互間のやりとりをも包括するものとして取り扱ってきた (石川 1984 : 133)。そして交換が研究の中心的主題であるのは、人々の「交換」活動が、

社会構造や社会過程の基礎となっているからに他ならないからであった（石川 1984 : 133-135）。だが、その研究方法となるとフランス流社会学や文化人類学の流れをくむ「全体主義的志向」と英米の社会学の流れをくむ「個人主義志向」とが社会的交換理論の骨子を形成しているといえる（Ekeh 1974）。

本稿の目的は、カナダ国ケベック州アクリビック村の1990年のクリスマス期間にみられた贈与交換やメッセージの交換について報告を行なうとともに、これらの交換活動を通して、現代のカナダ・イヌイット社会の構造を分析した後に、交換理論について若干の考察を加えることである。

2. アクリビック村の概況とクリスマス

A. 村を取巻く生態環境と歴史

アクリビック村は、カナダ国ケベック州の北西部のハドソン湾に面した所にあるイヌイットの村落である。その位置は、北緯60度48分、西経78度8分であり、寒冷ツンドラ地帯の上にあるため植生が極めて乏しい環境下にある。北極線より南に位置するため、完全な白夜や長夜はないが、長い冬（11月～4月末）と短い夏（7・8月）によって特徴づけられる。

現在のアクリビック村は、1970年代の初めから形成され始め、70年代半ばに行政村として公認された（岸上 n. d., 1988, 1990b）。1991年1月初めの人口は、約360名で、世帯総数は60あまりであった。この村の歴史を要約すれば、次のようになる（岸上 1988, 1990, n. d.）。

現代のアクリビック村の世帯主の祖父母にあたる人たちは、1920年代にケイプ・スミス島にあったハドソン湾会社（以下HBCと略）の交易所で毛皮取引に従事していたためにケイプ・スミス・イヌイットと呼ばれていた。このイヌイットは、もともとは2つの地域、ケベック州北部にあるウングバ湾のカングスジュアック（Kangisjuak）付近を主要な生活領域とするグループとハドソン湾側のポブングニツク（Povungunituk）からイヌクジュアック（Inukjuak）にかけての地域を生活領域とする2つのグループから形成されていた。この2つのグループは、1920年代から1950年代初めにかけてケイプ・スミス島のHBC交易所で行われた毛皮取引や婚姻による新しい社会関係の創出を通して、ケイプ・スミス・イヌイットとしての集団アイデンティティを形成した。

1950年代の初めにケイプ・スミス島にあったHBC交易所は閉鎖され、現在のポブングニツク村の南へと移転した。当時、蔓延していた結核病のため、ケイプ・スミス・イヌイットの総人口の3分の1にあたる人が、政府の手によってカナダ南部の病院へと送られた。このため、取引の都合や患者の帰りを待つためにこのイヌイットの人々は、ポブングニツク地域へと移り住んだ。当初、彼らはポブングニツク村には一時的に居住し、いつか

はケイブ・スミス地域へ帰りたいと考えていたが、1960年代に始まる政府のイヌイット定住化政策の実施のため、彼らは、ハドソン湾側の行政的中心地の一つであったポブングニックに他の地域からやってきたイヌイットのグループと約15年間一緒に住むことになった。

1970年代に、北ケベックの先住民の土地権その他の諸権利に関するジェームス湾協定の締結などを機に、ケイブ・スミス・イヌイットは、ケイブ・スミス地域へと帰り、現在のアクリビック村を形成し、現在に至っている（詳しくは、岸上 n.d.を参照）。

B. アクリビック村の現状とクリスマス

現在のイヌイットは、冬に雪の家に住むことはなく、政府が提供したプレハブ家屋に住んでおり、狩猟や漁撈の時にのみ野外でキャンプ生活をおくるといった生活様式をとっている。

経済活動も純粋な自立型の生業活動ではなく、生業と貨幣の混交経済システムをとっている。現在のイヌイットは、ライフル、化繊製漁網、スノーモービルや船外機付きカヌーなどを利用して、食糧を獲得するために、狩猟・漁撈活動を行なっているのである。また、イヌイットの現金収入源としては、生協や役場での仕事、ストーン・カービングの制作・販売、獲物の肉を村に売ることや、老齢年金、子女扶養手当、失業手当などのような政府が支給する福祉金・生活補助金などがある。

アクリビック村の一年の生業周期を四季に分けて記述すると次のようになる。11月から翌年の4月にかけての冬期は、海水上の呼吸穴や海水上の水際でのアザラシ猟、陸上でのカリブー猟や湖での網漁などが行われる。5月から6月にかけて氷が本格的に溶け始めるが、この時期には海水上の水際でのアザラシ猟、陸上でのカリブー猟や湖での網漁が行われる。7月から9月にかけての夏は、キャンプの季節であるが、海上でのカヌーを利用したアザラシ猟、海浜部でのホッキョクイワナの網漁、陸上でのカリブー猟や村の大型船を利用したセイウチ猟やシロイルカ猟が行われる。10月から11月にかけての秋には、海上でカヌーを利用したアザラシ猟や陸上でのカリブー猟が行われる。また川ではホッキョクイワナなどを取る網漁が行われる。なお、現在のアクリビック村では、少なくとも食糧の50%以上は狩猟や漁撈によって獲得される肉や魚であり、残りは現金によって生協で購入される缶詰、パンなどの食物である。

C. クリスマス

カナダ・イヌイットの伝統的な宗教はアニミズムとシャマニズムであった（注2）。北ケベックでは、1880年代に英国聖公会が布教活動を開始し、ケベック・イヌイットの大半は聖公会派に属している。アクリビック村にも英国聖公会派の教会があり、イヌイットの準牧師がいるが、彼が中心となって水曜日の夕方と日曜日の朝夕にはミサが行われている。キリスト教信者であるイヌイットにとってクリスマスは、復活祭と並びたいへんに重

要な儀式であるといえる。特に、カナダ・イヌイット社会においては、クリスマス・シーズンには、祝祭とプレゼント交換の季節であり、12月20日すぎから1月5日頃まではほぼ毎日、村や生協が主催する昼食会やゲーム大会が開催される（岸上 1991a, b）。1990年のクリスマスから1991年の新年にかけてのアクリビック村での行事は、以下の通りであった。

1990年12月22日*女性（主婦）の魚釣り大会

*男性は翌日の昼食会のためにライチョウ猟に行く

12月23日*村のコミュニティー・ホールで村全体の昼食会

*村レベルでのクリスマス・プレゼントの交換会

12月24日*(夜) コミュニティー・ホールでダンス

*ミサ

*ダンス

12月25日*(昼) 野外でのゲーム大会

* (夜) コミュニティー・ホールでのゲーム大会

12月26日*(昼) 野外でゲーム大会

(夜) コミュニティー・ホールでゲーム大会

12月27日*湖での魚釣り大会

12月29日*アザラン猟大会

12月31日*(昼) 野外でゲーム大会

(夜) コミュニティー・ホールでダンス

1991年1月1日*(朝) 野外でゲーム大会

(正午) 商品のばらまき

(昼) 野外でゲーム大会

1月2日*(夜) コミュニティー・ホールでダンスと生協主催の福引き

1月3日*(夜) コミュニティー・ホールでゲーム大会

1月4日*(夜) コミュニティー・ホールでゲーム大会

このように、クリスマスから新年にかけての休暇期間には、村のイヌイットは、ゲームやダンスをしてすごしている。

3. クリスマス・プレゼントの交換

アクリビック村で見られたクリスマス・プレゼントの交換は、村レベルのものと個人レベルのものという二つの種類に大別できる。

A. 村レベルでのプレゼントの交換

村レベルのクリスマス・プレゼントの交換は、村の役員によって企画され、制度化され

たものであり、クリスマスを祝う村の昼食会の後に行われる。1990年のクリスマスには、12月23日の午後2時より2時間あまりの時間をかけてコミュニティー・ホールで行われた。

村が組織したプレゼントの交換には、2つの種類がある。第一の交換は、村の学童全員の間で行われるものであり、第二の交換は、村の世帯主ないしは各世帯を代表する者約60名の間で行われるものである。

プレゼント交換の要領は、両方とも同じなので、ここでは世帯主間のプレゼント交換について述べることにする。この交換会が開催される約2週間前に、村の役員が各自だれに贈物をするか、アンケートをとり、調整を行って、各世帯の代表が必ずプレゼントを一つ与え、一つもらえるようにする。

プレゼントの交換会の当日までに、プレゼントを用意し、当日、紙に包んで持参する。進行役の指示に従って、世帯代表が、各々、プレゼントを持って大きな円座をつくる。進行役の2名がその円座の中央に立ち、まず、ライターを回転させ、ライターの一方の先端が向いた方向に座っていた者をまず指名し、中央にこさせる。進行役は、その人がだれにプレゼントすることになっているかをたずね、その人物の名前を呼ぶ。呼ばれた人物は中央にやってきて、プレゼントを貰う。プレゼントを貰った者は、皆の前でこれを開いてみせる。今度は、プレゼントを貰った人物がだれにプレゼントをあげるかを告げ、進行役がその人物を円座の中央にこさせる。そしてプレゼントを貰い、次に彼のプレゼントを次の人へ渡すというやり方で全員が終わるまで繰り返す。このプレゼント交換が終わるまでに2時間あまりを要する。

ある人物は、工具キット一式を貰い、ティー・カップ一式をプレゼントとして渡したが、通常、贈物は日用品か道具であり、20～30カナダ・ドル（日本円で2400～3600円ぐらいに相当）のものが一番多かった。この交換で興味深いのは、交換のやり方が特定の世帯代表2名間で互にプレゼントを交換するという限定交換（A→B、C→D）ではなく、貰った人は、送り手とは別の人にプレゼントを贈るという一般交換（A→B→C→D→）であり、プレゼント交換を通して、品物が全世帯を一周する形をとる。レヴィ＝ストロースの交差イトコ婚についてのモデルをアナロジーとすれば、このプレゼント交換は彼の言う一般交換に相当し、この交換によって村の各世帯を連結し、統合することになる。村が全世帯を対象として一般交換形式のプレゼント交換を制度化したことは、次の点で重要である。すなわち、この交換のネットワークに全世帯が参加することによって、日常の生活では社会・経済的自立化が進んだ世帯間が連結させられることになり、村人の一体感ないしはアイデンティティーが再確認される機会となる。これは、また、村の住民全員が血族と姻族の関係の網の目によって結びつけられているアクリビック村の社会的相互扶助の規範の存在とその重要性を象徴していると考えられる。

B. 個人レベルの交換

クリスマスの時には、村人の中で個人的なプレゼントの贈与や交換が行われるが、そのような慣行の中に、伝統的な社会関係が存続し、作動していることを伺い知ることができる。

アドミーという40才代初めの男性に焦点をあててみよう。筆者が知りえた限りでは、彼については、次のようなクリスマス・プレゼントの贈与や授受が見られた。

① 彼は、同じ村に住むサウニク (Sauniq) からキリスト像の壁かけを貰った。また、隣村に住むサウニクからプロ・ホッケー・チームのTシャツを貰った。

サウニクとはイヌイット語で「骨」を意味する単語で、同一人物に由来する名前を共有する同名者を呼ぶ時に使用される特殊な用語である。イヌイット社会では、名前に靈魂が宿っていると信じられている。その靈魂には、特定の性格、感性、意志、パーソナリティーや狩猟の技量のような人間の属性が内在しており、新生児に名前をつけることによって靈魂とその属性が新生児にのりうつると考えられている(岸上 1990a)。従って同一の名前を持つことは同一の人間的な属性を持つことを意味し、社会的に特殊な人間関係を持つ。

この同名者関係は、イヌイット文化においては重要な関係であるが、現代の日常生活では一種の冗談関係や象徴的に重要な社会関係としてとしか顕在的には機能していないといえる。しかしクリスマスの時のような非日常的な場では、クリスマス・プレゼントの交換や贈与の相手となっており、同名者関係の存在が一時的であれ、顕在化している。

② 彼は、隣村に住むオバから手袋をプレゼントとして貰った。

彼は、昔からかわいがってもらっていた約100キロ離れた隣村に住むオバを訪問した時に、オバからプレゼントを貰ってきた。拡大家族関係にある血縁者の中でも特に親密な関係にある人からプレゼントを貰っていることになる。

③ 彼は、同じ村に住むアングシアク (angoshiak) からブーツ (冬くつ) を貰った。

伝統的なイヌイット社会では、子供が生まれた時に、へその緒を切り、最初に服を着せた者(以下これを助産人と呼ぶ)とその子供は、二人が生きている限り特殊な社会関係を形成する。子供は、全ての種類の最初に取った獲物や作った物を助産人に贈る義務があり、一方、助産人は折をみて子供にプレゼントを贈ったり、いろいろな教育を施したりする。現在では、大きな村や町の病院で出産が行われ、イヌイットの助産人が産室に入ることができないため、新生児とその母親が村に帰ってきてから助産人が決定される。従って、現在のそれは、象徴的な助産人といえる。しかし子供とその助産人の社会関係の内容や相互作用のパターンは従前通りである。助産人は、男であっても、女であっても、子供からはサナジ (sanaji) と呼ばれる。一方、助産人は、女の子であればアナリアック (arnaliak) と、男の子であればアングシアク (angoshiak) と呼ぶ。アドミーは、彼が象徴的な助産人となっている男の子からブーツをプレゼントして貰ったわけである。ちなみにこの

プレゼントは、その子の両親によって準備されたものであった。

④ 彼は、自分の妻や子供以外に同じ村に住む自分の姉、妹、父方オジ（古老）や母方オバ（古老）に鏡やシロイルカの肉などをプレゼントした。

彼は、血縁者の中で、日頃、親しくしている自分の姉妹やこれまで面倒をみてきてもらったことがあり、尊敬しているオジやオバにプレゼントを贈っている（彼の両親は既に亡くなっている）。プレゼントを贈る対象は、拡大家族関係にある血縁者であり、日常の親密さを反映していると言える。

⑤ 彼は、同村に住むまだ赤ん坊のサウニック二人に、靴などのプレゼントを贈った。

彼は、自分の名前を持つ赤ん坊に、プレゼントを贈った。これは、上の①で述べた逆のケースである。

この男性の事例から分かることは、クリスマス・プレゼントの交換や贈与は、(1)拡大家族関係にある血縁者の中でも特に日頃親しくしている者の間、(2)同名者間や(3)助産人と子供の間で行われていることである。ここで注目すべき点は、これらの3種類の社会関係は、伝統的なイヌイット社会の基礎を形成していたものであり、その関係が現在でもクリスマス時にはプレゼント交換を通して顕在化していることである。

4. クリスマスと新年のメッセージ交換

欧米では、クリスマスの時に家族や親族の者が集まったり、クリスマス・カードや電話で連絡をとりあったりするが、現代のイヌイット社会では、クリスマスや新年を迎えた時に、電話やFM ラジオ放送を利用してのメッセージ交換が盛んに行われている。

A. 電話によるメッセージ交換

アクリビック村では、電話が1980年代の半ばから普及し始め、現在では一世帯に一台の電話どころか、多数の若者が自分の部屋に電話を引いている。電話は本来、1対1のコミュニケーションの手段ではあるが、この導入と使用は、イヌイットの人間関係に多大な影響を及ぼすに至っている。電話によるコミュニケーションは、村内コミュニケーションと村外コミュニケーションに大別できる。

村内コミュニケーションに電話を利用すれば、訪問しなくても、狩猟の打ち合わせ、食事への招待や必要な物をねだるなどのお願いをすることができるようになった。イヌイット社会では、人々は頻繁に親族の者や友人を訪問する慣習があるが、テレビ、ビデオや電話の普及とともに、この訪問慣習やパターンが変化し、対面的な接触の頻度が少なくなってきたように見受けられる。

また村外コミュニケーションに電話を利用することによって、遠方や他地域の村に住んでおり、日頃は会うことのできない親族の者や友人と簡単に連絡が取れるようになった。電話がイヌイット社会に普及する以前は、ひとたび別れ、別々の村に住むと再会すること

は極めて難しいことであったが、電話を利用するようになってからは、近況をお互いに知らせ合うことができるようになった。従って、かつて親族関係維持の基礎は、同一の村ないし近隣の村に住み、会ったり、話したり、一緒に仕事をするのであったが、電話の導入によってそれらのことは必ずしも必要条件ではなくなってきた。例えば、イヌイット社会に特徴的な相互扶助は、原則的に所与の時点で同一の場所にいる親族や友人の間で行われてきたが、筆者の友人の一人のイヌイットは、金銭に困った時は、約 200 キロメートル離れたところの村に住む兄の一人に電話をかけ助けを求めていた。

このように電話の導入は、イヌイットのコミュニケーション・パターンに革新をもたらし、社会関係などに多大の影響を及ぼしてきたといえるのである。このことは、クリスマスや新年のような現代のイヌイット社会の祝祭の時にも妥当する。この季節には、他村に住むイヌイットの友人や親族の者との間で盛んに「クリスマスおめでとう」や「新年おめでとう」のメッセージ交換が電話によってなされ、近況の報告や旧交を温めることが行われているのである。電話の相手は、他の村で現在、生活をしている親子、兄弟姉妹を中心とする大家族の成員、同名者、助産人や友人たちである。

B. 村内の FM ラジオ放送

カナダ政府の政策により、極北地方にあるすべての村落には、村内向けの FM ラジオ放送施設が設置されている。この FM ラジオ放送は、電話の利用とあいまって、イヌイットのコミュニケーション・パターンに革新をもたらしてきたといっても過言ではない。

特に、電話とは異なり、ラジオ放送は一挙に、多数の人間に同じ情報を伝達することができるという点で重要である。

通常、一人のアナウンサーなり DJ が村内にある FM ラジオ放送所から、村民に対し放送をし、情報を伝達するのが一般的ではあるが、各世帯の電話の普及・利用により、村人が家から放送所に電話をかければ、アナウンサーがラジオ放送に接続し、村中の全世帯へとその話しを放送することができるようになった。すなわち一方的とはいえ、1 対複数の村人とのコミュニケーションが可能となったのである。例えば、村内でだれかを探しているとすると、ラジオ放送所に電話をかけ、その人物にたいし、だれだれに電話をしてくれと放送する。また、村役場や政府の通達事項、誕生日のお祝い、子供の出生の知らせ、人の死亡の知らせなどを放送したり、村人の意見や情報交換の手段として FM ラジオ放送が活用されている（注 3）。そして新年の挨拶やクリスマスのメッセージ交換にも、FM ラジオ放送が利用されているのである。

現在のアクリビック村のイヌイットは、各自が FM 放送所に電話をかけ、村人全員や何人かの村人に対し、新年やクリスマスのメッセージを、一日中、放送しあっている。他の村の FM ラジオ放送所へ長距離電話をかけることによって、他村に住む親戚や友人に新年の挨拶やクリスマスのメッセージを伝えることができるようになった。例えばアクリ

ビック村のアドミー・アナウタックの家では、アドミーと彼の妻アマリーが、約100キロ離れた村に住んでいるアマリーの母親、その家族や親戚の者にクリスマスのメッセージを伝えるため、隣村のFMラジオ放送所に長距離電話をかけ、メッセージをその村中に流した。翌日には、アマリーの母親が、アクリビック村のFMラジオ放送所に電話をかけ、アマリーの家族やアクリビック村に住む友人や親戚にクリスマスのメッセージを村中に流した。

このように各々の村で行われているFMラジオ放送や各世帯にある電話の利用により、一人の人間が、一方的であるにせよ、村内外の多数の人間に情報を伝達できるようになったという点で、イヌイットの情報交換やコミュニケーションのパタンに大きな変化をもたらし、ひいては社会関係にも大きな影響を及ぼしているのである。

5. 小結

カナダ・イヌイット社会のクリスマス・シーズンは、祝祭とプレゼント交換の季節である。カナダ国ケベック州にあるアクリビック村では、年末の12月20日頃から翌年の1月初頭にかけての約2週間は、村が主催するゲーム大会、昼食会やプレゼントの交換会など村全体をひとつの単位とする催しが多数開催された。

本稿では、このクリスマスから新年にかけてみられたクリスマス・プレゼントの交換とメッセージ交換について報告してきた。その結果を要約すると次のようになる。

① クリスマス・プレゼントの交換には、制度化された村レベルの交換と個人レベルの交換がみられる。

② 村レベルのプレゼントの交換は、経済的価値の低い品が、世帯AからBへ、BからCへと村中の全世帯を横切るように交換されていき、村レベルでの互酬性や相互扶助の規範を象徴的に示していると考えられる。また、この慣行は、村の社会的統合にも一役かかっていると言える。

③ 個人レベルのプレゼント交換では、主体的に贈与する相手が決められるが、贈与や交換の相手は、拡大家族メンバーの中でも特に親しい者、同名者や助産人であることが多い。

④ クリスマスや新年のメッセージの交換は、電話やFMラジオ放送を利用して行われる。

⑤ 電話やFMラジオ放送の利用によって、メッセージが他の村に住む友人や親戚にも伝えることができるようになり、これまでにない形の親族の連帯性や友人関係の維持ができるようになった。

⑥ 電話によるメッセージ交換は1対1であるが、FMラジオ放送の利用により1対多数でメッセージを送ることが可能になった。

⑦ メッセージが交換される相手は、村内外に住む血縁および婚姻による親戚、友人、同名者や助産人であることが多い。

以上、7つの点から判断すると、現代のイヌイット社会のクリスマス・シーズンにみられるクリスマス・プレゼントの交換やメッセージの交換の基礎となる人間関係は、村全体、拡大家族関係や同名者関係や助産人関係であると結論しえる。実は、これらの人間関係は、伝統的なイヌイット社会の基礎を形成する社会関係であった。かかる点から、この100年のうちに世帯の核家族化ないし小規模化、労働単位の小集団化や少人数化により、表面的にはイヌイット社会の構造は大きく変化してきているように見えるものの、クリスマス・シーズンなどの折には、伝統的な拡大家族関係や特殊な社会関係が作動しており、社会の通時的な連続性がみられるといえる。

本研究の成果と関連して、文化人類学や社会学の幾つかの交換理論について二つほど意見を述べておきたい。社会学者のホマンズもブラウも程度の差はあれ、1対1の相互作用ないし交換活動を分析の基盤としているが、文化人類学では、交換活動と全体社会との関係、や交換システムが分析の対象とされてきた。本研究の成果は、後者の分析アプローチの正当性を支持するものである。イヌイット社会におけるプレゼント交換やメッセージの交換を事例とするならば、1対1の相互作用に着目して交換活動を分析することは実りの多いアプローチとはいえない。というのも交換活動の背後には、親族関係や他の特殊な社会関係のシステムが存在し、その理解なしには、イヌイットの交換を理解できないと考えられるからである。従って、個人の行為に着目する社会学的交換理論をより一層発展させるためには、二者間関係から出発するのではなく三者間関係以上の関係から分析しなければならないし（例えば増子 1982, 注4）、交換活動を単に功利的な視点から分析するのではなく、活動が行われている社会システムの関係のなかで把握することが必要であると思われる。

また、文化人類学者サーリンズの提唱した3つの交換概念と社会的距離との関係についていうならば、イヌイット社会におけるクリスマスのメッセージやプレゼントの交換は、大半がサーリンズの言う「一般的互酬性」に相当する。そしてそれら交換の範囲について言うならば、交通の便の発達や新しい通信技術の導入によってその地理的距離は拡大しつつあるが、社会的な距離という点では、依然として拡大家族のメンバーや特殊な社会関係（疑似的親族関係）にある人々である。したがって一般的互酬性と親族関係の社会的距離とは相関関係があるとするサーリンズの仮説をこの研究は支持している（注5）。

（謝辞）本研究は、1990-1991年のカナダ国ケベック州アクリビック村での第5次調査の成果の一部である。この調査は1990年度カナダ政府研究出版補助金により可能となった。さらにデータの整理・分析を行うにあたって、平成3年度文部省科学研究費（奨励研究

A, 課題番号 03710134) の助成を得た。カナダ国政府と日本国文部省に対し、記して感謝する次第である。

注

- (1) ポトラッチとはチヌーリ語で食物を供給するや消費することを意味する語である。この慣行は、主に対立する集団間もしくは個人間で行われ、相手から財の贈与をうけた者は、それ以上の財を返礼しなければならないとする一種の放蕩的贈与競争のことである。この慣行は、西欧的な経済原則によっては理解されえなかった。
- (2) アニミズムは万物に靈魂が宿っているという思想であり、シャマニズムとは、「シャマンを中心とする世界観、儀礼、信者、依頼者集団などからなる一宗教形態である。」(佐々木 1988:344)。なお、シャマンとは「神や精霊からその力能をえ、神や精霊との直接交流によって託宣、予言、治病、祭儀などを行う呪術—宗教的職能者」のことである(佐々木 1988:344)。
- (3) FMラジオ放送を通して、人が良いことをしても悪いことをしても、すぐに他の村民に知られてしまう。うわさとともに、FMラジオ放送は、社会的制裁や社会統制の手段という潜在的な機能を有している。
- (4) 二者間関係は、観察しやすく分析の単位として用いられてきたが、その関係は社会全体の縮図ではない。例えば、「宮崎県の幸島で群を離れて単独生活を送っているオスたちが2頭だけ出会っている「場」においては、たがいの優劣関係をあからさまに示すような行動はほとんどみられず、かなり対等な相互行為を展開する。しかし、ここにもう1頭オスが加わり「場」の構造が三者的なもの変わったとたん、にわかに優劣関係があからさまになる。」(菅原 1991:26)。
- (5) なお、バーチ (Burch 1970) はアラスカ北部のイヌイット社会にかつて存在していた交易パートナー関係の研究をとおしてサーリンズの一般的互酬性の概念には、問題があることを指摘している。

引用文献

- Blau, P. M.
1964 Exchange and Power in Social Life. New York:Wiley.
間場・居安・塩原訳『交換と権力』(1974, 新曜社)
- Burch, Jr., E. S.
1970 The Eskimo Trading Partnership in North Alaska:A Study in
"balanced reciprocity" Anthropological Papers of the University
of Alaska. Vol. 15(1):49-80.

Ekeh, P. P.

- 1974 Social Exchange Theory. London:Heinemann Educational Books Ltd. 小川浩一訳『社会的交換理論』(1980, 新泉社)

Homans, G. C.

- 1974 Social Behavior:Its Elementary Forms. New York:Harcout Brace Jovanovich, Inc. 橋本茂訳『社会行動—その基本形態』(1978, 誠信書房)

石川 実

- 1984 交換理論 新睦人・中野秀一編『社会学のあゆみ パートⅡ 新しい社会学の展開』第六章, 有斐閣新書

岸上 伸啓

- 1988 イヌイット社会における養子縁組の変遷『季刊 人類学』第19巻 4号 PP.100-128.
- 1990a カナダ・イヌイットの人名, 命名方法および名前に基づく社会関係について 『民族学研究』第54巻4号 PP.485-495.
- 1990b 接触=伝統期におけるカナダ・イヌイットのキャンプ集団の構成原理について 『社会人類学年報 1990年』第16巻 PP.165-177.
- 1991a カナダ・イヌイット社会のクリスマス・シーズンについて 平成3年度北海道民族学会第1回研究大会(5月11日)北海道大学学術交流会館に於いて
- 1991b 極北のメリー・クリスマス:カナダ・イヌイット社会の祝祭と交換の季節 函館人文学会(7月13日)北海道教育大学函館分校に於いて
- n. d カナダ・イヌイットの村落形成について:アクリビック村形成の事例を中心に 『北の人類学』(仮称)所収予定 岡田宏明・岡田淳子編著, アカデミア出版会

Lévi-Strauss, C.

- 1949 Les Structures élémentaires de la parenté. Paris:P. U. F. 馬淵東一・田島節夫監訳 『親族の基本構造』上下 (1978 番町書房)

Malinowski, B. K.

- 1922 Argonauts of the Western Pacific:An Account of Native Enterprise and Adventure on the Archipelagoues of Melanesian New Guinea. London:George Routledge and Sons, Ltd. 寺田和夫・増田義郎共訳『西太平洋の遠洋航海者』(世界の名著59所収)中央公論社

増子 勝義

- 1982 「互酬性」の新たな視角ーダイアデックモデルを超えてー
『社会学年誌』第23号 PP.61-78.

Mauss, M.

- 1923 / 24 Essai sur le don. Forme et raison de l'échange dans les sociétés arcaïques. *Années Sociologique*, Nlle Série I. PP.30-186.

贈与論 有地亨訳 『社会学と人類学 I』所収 (1973 弘文堂)

佐々木 宏幹

- 1988 シャマン・シャマニズム

石川他編 『文化人類学事典』 PP.344-345. 弘文堂

Shalins, M.

- 1972 Stone Age Economics. Chicago:Aldine publishing Co.
山内訳 『石器時代の経済学』 (1984 法政大学出版局)

Simmel, G.

- 1900 Philosophie des Geldes.

安居正訳『貨幣の哲学』(ジンメル著作集2,3 1981,78 白水社)

菅原 和孝

- 1991 対象としての人間社会

米山・谷編 『文化人類学を学ぶ人のために』第1章, 世界思想社

(北海道教育大学函館分校)